

# いま手渡したいこと

## 子どもたちに文化を

## 教師にあこがれと自由を

この文章がみなさんの手許に届くのは4月、新年度を迎え、学校の先生ならば、新しく担任になった子どもたちとの生活が始まっている頃です。新任の先生にとって、文字通り「はじめて受け持った私の子どもたち」との生活、経験のある先生も、「今年はこの子たちの担任」と、思いを新たにしている毎日が始まっていることでしょう。

前回私は「子どもの味方になる」ということを書きましたが、先生たちに「味方」になってほしいのは、抽象的・一般的な「子ども」ではありません。「自分のクラスさえよければいい」ということでは困りますが、それでもまずは、自分の目の前にいるクラスの子どもたち、「この子」の「味方になる」ことがスタートです。でも、それは時として簡単なことではない、そんなことを前回書きました。障害をもちながら子ども時代・青年時代を懸命に生きていく目の前の「この子」の味方になる、それはどんなふうにしたらよいのでしょうか。

### 子どもの悲しさを知る

三木裕和さん（鳥取大学）は、10数年前の本誌に次のように書いています。

「障害児学校に勤め、障害児と親しくなる。いっしょに遊んだり、学習したり、生活介護の一端を担ったりする。障害について学習もし、いっぱしの『関係者』になつたような気になります。しかしそれだけで『障害をもつて生きる』ことについて、わかったわけではありません」（『障害児の辛さや悲しさを知り生きる希望を示す』『みんなのねがい』2005年4月号）。

「子どもをみる目」という特集タイトルだったこの号も春の号でした。三木さんは、はじめて障害児教育という分野に職を得た人たちの、働き始めの時期の経験と心の動きを念頭におきながら、「しかしそれだけで『障害をもつて生きる』ことについてわかったわけではない」と言います。ではなにが大切なのか。

三木さんは、教師として、障害のある子どもたちに日々接する「私たち」にとって「もっとも大切なもの」は、「障害をもつて生きる人の辛さや悲しさを具体的に知る」ことであり、そのことを知った上で「なおかつ、この人たちに生きる希望を示すことができる、優しくもたくましい力」なのだと言っています。実はこの文章が本誌に載った時に、当時のゼミの学生と一緒に読んでたころ、「どうして悲しみなのでしょう？ 私は子どもたちと一緒に喜びや楽しさをたくさん味わえる教師になりたいのですが…」という感想が出されました。なぜ三木さんは、「悲しさや辛さ」に目を向けるのでしょうか。

三木さんは先の文章に続けて、ご自身が長く担任して

### 第2回

## 子どもの〈声〉を聴き、その悲しみをつかむ



こしの かずゆき／1964年生まれ、奈良教育大学教授。専門は障害児教育学。全国障害者問題研究会副委員長、研究推進委員会委員長。著書に『子どもからはじめる算数一すべての子どもに学ぶ喜びを』（共著）（全障研出版部、2017年）など。

奈良教育大学  
越野和之

きた重症心身障害児と言われる子どもたちに触れ、この子たちの日々の暮らしを、「自分で自分のからだを動かすことができませぬ。呼吸や摂食に苦しみがつきまといまふ。生きることそのものが戦いなのです」と描き出します。教師は、子どもたちの毎日の生活のなかにあるそうした「苦しさや辛さ」をよく知る必要がある。それを知っているからこそ、「体調の良い時に、戸外に出てホッとした笑顔が生まれた」り、「自分で自分の体を少しでも動かせた」ことの意味を、子ども自身のかけがえない幸福としてとらえることができるのだといふのです。

同様に自閉症児についても、「身のまわりのできごとに不快や不安を感じ苦しんで」いる存在、自分自身の「個性的」な楽しみや遊びを「人にもわかってほしい」「それを認め共感してほしい」とねがっている存在ととらえ、しかしそれが「理解されにくい」ことの辛さを抱えている子どもたちだと三木さんは描きます。そして、そうした子どもたちの「辛さや悲しさ」は、「実は、幸福に生きたいという『希望の種』だといふのです。

子どもたちが、障害の存在や、さまざまな生活上の背景ゆえに、日々直面せざるを得ない「辛さや悲しさ」を深くとらえ、そのうちに、本当はこんなふうになりたい、こんなふうに住きたいという「希望の種」を見出すこと、子どもたちをそんなまなざしで見ることが、「子どもの味方になる」ことの出発点になるのではないでしょう。

### 「問題行動」のなかに「発達要求」をとらえるために

しかし、（このことは三木さん自身も言っていることですが）そんなふうにとらえることの難しい子どももい